

第5回大賞(金の星賞)受賞作品

# 「カッパのはなし」

福島県 県立光南高等学校 三年 矢吹優衣



賢治のまちから  
**高校生★童話大賞**



金の星賞

福島県立光南高等学校 三年 矢吹優衣

## 『カツパのはなし』

カツパは人間が怖い。

生まれてからほんの数十年の子供の頃、通りすがりの馬にいたずらをした  
ら逆にとつつかまって、こてんぱんにやられてしまったのだ。その時の恐  
ろしさといったら、今でも頭の皿がギリギリ傷むほど。それからカツパは  
川から出ることを恐れ、川底に引きこもりつきりなつてしまつた。

無邪気だった子供の頃とはまるで正反対の、暗くて陰険な眼差し。世間一  
般に愛されているカツパの面影などみじんも感じられない。

川の生き物たちは、こんな風になつたカツパを初めの内は心配して励まし  
たり勇気づけてくれていたが、次第に諦め無関心になり、今では無視をす  
るか馬鹿にするようになつていた。

カツパももうそんなのは慣れっこで、毎日ごろごろ寝ては魚を食べ、また  
寝ては時々泳ぎに行く日々を送つていた。大好物のキュウリを食べたのだつ  
て、もう遠い昔のことだ。

今、カツパは大人になりかけている。生まれた頃のこともよく思い出せな  
いくらい、月日は流れ歳をとつていた。

きっと人間の世界はすっかり変わつているのだろう。あのときの人間だつ  
てとつくに死んでしまつたし、もう恐れるものは何もないのだ。

けれどカツパはまだ人間が怖かった。あの時のような目に遭つたらどうし  
よう。

今度こそ逃げられないかも。時々地上に上ることを考える。しかし、い  
つも恐怖が先だち、簡単に諦めてしまう。

このままいいよ。わざわざ行く必要はない。このまま平穏な生活を、い



賀治のまちから

## 高校生☆電話大賞

つか消える日まで繰り返せばいいんだ。

友達は少ないし、陰口は叩かれるし、毎日フナしか食えないし、おまけに近所のカワウソには毎日小言をされるけれど、外に出ることに比べたらずつとマシだ。カツパには仕事なんてないし、川の中でひとつそりと生きて行くのが自分らしいんだ。

と、今日も昼過ぎまで寝ていたカツパは、顔を洗いながら自分に言い聞かせた。もう食べ飽きたフナを平らげると、ボケーっとしながら水中の様子を眺める。

ほんの少しにごった灰水色の水中。ゆつたりと流れる水は、秋から近いせいかこの間よりも冷たくなっていた。少し先をコイが泳いで行く。タガメやミズスマシが水面に向かってチヨロチヨロと上っていく。カツパの家の周りには水草がもつさり茂っている。外から見えにくいようにわざと増やしたのだ。

何匹か小魚が通ったが、誰もカツパの方を見向きもしない。この川の中でカツパの存在は、もしかしたらミジンコより薄いのかも知れない。ミジンコはミジンコで色々役に立っているから、カツパよりも格上である。ミジンコ以下。

カツパは誰の役にも立っていない。

なんだか憂鬱になってきたので、カツパはまた寝ることにした。  
自分なんて、さつさと消えてしまえばいいのに。

カツパは厳密にいうと、普通の生き物みたいに死んだりはしない。病氣にもならないし、カツパには万病に効く秘薬が作れる。カツパが死ぬのは、そのカツパの存在を、人間が一人でも信じていれば、カツパは消えることがない。

逆に、それまでカツパは死ぬことができない。どんなに辛くて逃げたくても、カツパは自分の意志では死ねないのだ。

ということは、まだ誰かが自分の存在を感じているということ。

カツパはそれを思いついて、なんだか複雑な気持ちになる。自分は一体人間にどんな風に思われているんだろう。悪者にされているのか。間抜けな奴と思われているのか。

ブルツと体が震えた。あの恐ろしい人間が自分を覚えていて、もしも捕獲しようと企んでいたら。川まで追いかけてきたら。

そんな馬鹿みたいなことを考えていたら、誰かがやってきた。

「いないの？ 勝手にお邪魔するよ」

聞き慣れた声がして、カツパの寝床まで誰かが泳いでくる。顔を上げると、唯一の友達のヒキガエルが間抜けな顔で平泳ぎをしていた。

「・・・おはよう」

「うん。お邪魔していい？ 寝てた？」

「別に。いつも通りさ」

ヒキガエルは見た目こそ醜いけれど、性格は穏やかで気のいいヤツだ。カツパよりずっと小さくて歳も若いが、卵の頃から知った仲である。見た目も似ているし、なんとなく一人は馬が合う。こうやって何気ない会話をしたり、ぼけーっとして過ごすのだった。

こんな陰気な引きこもりガッパを相手にしてくれるのは、ヒキだけだ。例え他がカツパを忘れてしまったって、ヒキがいればかまわない。

そんなこと、本人には言えなければど。

「あのねえ、ブルーギルのヤツが、またメダカちゃんをいじめたらしいよ。本当にやなヤツだよねえ」

「あいつ、余所から來たくせに。ちょっと強いからって威張り散らして。メダカは弱くておとなしいからな」

「あとねえ、ナマズのおっさんがねえ、明日大地震がくるって騒いでいるみ



たいだよ」

「しそつちゅうそう言つてるけれど、きた試しがないよな。飲み過ぎだ  
二人並んで水中を見つめながら、たわいもないことをはなした。

昼頃フナを捕りに行つた帰り、運悪くカワウソ姉さんにつかまつた。  
「ちよいとアンタ、何コソコソ隠れようつてんだい。このあたしから逃げようつたつてそのはいかないよオ」

鋭い眼でにらめつけられ、臆病なカツバは泣きそうになる。この年増の力  
ワウソは、どうも妖怪じみていてカツバは苦手だった。気の強いヤツが苦  
手なのもあるし、会う度にお前はダメだの社会脱落者だの、カツバをボロ  
クソになすので、できれば会いたくないのだ。

「べ別に・・・あの俺目が悪いから」

「何言つてんだいこのカツバは。アンタ三十間先の小ブナのウロコまで見え  
るくせに。それより爺さん見なかつたかい、あのカメまたどつかに行つち  
まつたんだ」

爺さんというのはクサガメのことである。カツバの記憶では子供の頃から  
いたので、かなりの長生きだ。カメは万年というが、もしかしたら本当か  
も知れない。

「知らないです・・・い痛い、離してえ」

姐さんはつかんでいたカツバの頭を乱暴に離すと、舌打ちをしてさつさと  
行つてしまつた。

亀は最近認知症らしい。

家に帰ると、そのカメがのんびりとくつろいでいるではないか。ヒキと  
仲良く語りながら。

「あ、カツバ、おじいさんがいらつしゃつてるよ」

「…爺さんカワウソの姐さんが探してたぞ。勝手に出歩いちやダメだらう  
カメは首をゆつくりと傾げて、固まつたと思うとまたゆつくりと首を戻し



賢治のまちから

## 高校生☆童話大賞

た。

尻尾から長い藻が生えている。福を呼びそうなありがたい姿だ。

「はあ？ ああそうじやのう、今日もいい天気じやなあ」

「いやそうじやなくて」ワシはカワウソよりイタチの方が好みじや

「誰も訊いてないし、姐さんが聞いたら怒るし」

カツパはカワウソがいないか辺りを窺う。怒らせたら何をされるか。昔から狸や狐と並んで人間に妖怪扱いされてきた生き物だ、何だかカツパよりも強そうである。

何を言つてもさっぱり通じないので、しばらく放つておいたらその内姐さんが現れた。カツパは帰り際キツイ言葉を浴びせられた。

「アンタ、本当にこのままでいいと思つてんのかい？ 天下のカツパ様がなんて様だい。かつては水神様ともされたカツパも、今じゃただの臆病者の引きこもり！ 同じ水の怪としてあたしゃ恥ずかしいよ。たかが人間に捕まつたくらいで何だつてんだ。カツパ失格だよッ」

カツパは姐さんの怒鳴り声に何も言い返さず、ひたすら押し黙つていた。その姿に余計腹を立てた姐さんは、カメをかかえて去つてしまつた。

しーんとした場を取り繕おうと、ヒキが精一杯明るく言う。

「あのさ、姐さんも本当はカツパを心配してくれてるんだよ。同じ妖怪なまだし。キツイ言葉でやる氣出せようとしてるんだよ。だからあんまり気にしないで、カツパだつていっぱい悩んでるんだもんね」

ヒキはそう言つてくれるが、カツパにもちゃんとわかっているのだ。姐さんが根は優しいカワウソだということも、爺さんがたまに訪ねて来ては、相手をしてくれていることも。

そして、本当はヒキが一番カツパの回復を願つてくれていることも。でも、できないものはできない。怖いものは怖いのだ。今までカツパだつて何もしなかつたわけじやない。

カツパが黙っているのを見て、ヒキは諦めたように帰つて行つた。  
帰り際、ぽつりとこう言い残して。

「あのね、地上せかいは昔とすっかり変わったんだ。カツパの見たことないものがいっぱいあるんだよ。人間もずいぶん変わったんだよ。変わらないのはカツパだけだ。

……僕、カツパに見せたいがあるんだ。一緒に見たいものが  
カツパは何も答えなかつた。

ほんやりしているうちに日はあつという間に暮れた。その夜の川は、月の光もなくても冷たかつた。

翌日の朝、カツパは姉さんの大声で目を覚ました。

「起きろカツパ！ 大変なんだよ、アンタのダチが人間にとつつかまつたん  
だッ」

寝起きの悪いカツパが、一瞬にして覚醒した。

ヒキが捕まつた？

「に……人間に？」

ウソだろ、と言いかけて、姉さんの真剣な顔を見たら口口ごもつてしまつた。  
本当なんだ。

「人間がなんでヒキを」

「ヒキガエルっていえば解剖つて相場は決まつてるじゃないか。あのお人好、  
鈍くさいからねえ……まずいよアンタ、あのカエル開きにされちまう」

「ひ、ひひひらッ」

カツパは真つ青になつた。たつた一人の友人が、あの優しいヒキが、恐ろしい人間の餌食に！

カツパは慌てふためくが、どうしていいのかわからずただオロオロする。  
ヒキ、ヒキ。どうしようウソだらう、ああこれが夢だつたらどんなにいいか。

どうして昨日あんな冷たい態度をとつてしまつた。ヒキの気持ちを考えずに、自分勝手なことばかりして。

取り乱したカツパを見かねて、姉さんが思いつきり腹を叩く。

「落ち着くんだよこのダメカツパ！さつさと助けに行かないか、アンタの友達だろうツ」

「た・・・助けに？で、でも俺なんか・・・」

そうだ、自分なんかよりも頼りになる者がいるはずだ。強くて勇気のある、他の誰かが。

でも、そんなヤツがどこにいる？そんな都合のいいヤツが。ヒキ。どうしよう。自分はまだ迷つてる。大事なきみがピンチだというのに、まだここから出ることを恐れているんだ。

こんな自分に何ができるんだよ。弱虫で臆病なカツパ失格の自分に。友達失格の自分に。

カツパは水上を見上げた。水は光を浴びて水晶のようにキラキラしているし、魚はいつもと変わらず泳いでいる。

こんな一大事が起こっているのに、世界は何も変わつていない。

ひどい。ヒキがどうなるうと、世界は氣にもとめない。自分のことだってそうだ、きっとカツパがどうなるうとみんなどうだつていいんだ。カツパがいようといまいと、世界は何も変わらない。

こんな世界のどこに、他にヒキを救ってくれるヤツがいる？

みんな自分以外のことには無関心だ。自分はひとりぼっちだ。カツパはずつとそう思つていた。

だけどヒキだけは違う。こんな自分に笑いかけてくれる。そばにいてくれる。だから自分は完全にダメにならずにいられた。

ヒキがいたからカツパはカツパでいられたのだ。

姉さんが、いつになく静かな声でつぶやいた。



「カツパ、アンタはカツパなんだよ。川一番のイタズラ者で相撲の好きな、妖怪カツパなんだ。そのアンタより強い生き物なんて、この川にはいないんだから」

「姐さん・・・俺を、背中から蹴っ飛ばしてくれないかな」

カワウソはカツパの目をじっと見つめた。いつもと同じ間抜け顔だが、目の奥に決意を感じた。足がガクガク震えているくせに。

姐さんの口元がクスリと笑う。

「よおし、いい度胸じゃないか。後悔するんじゃないよ」

姐さんは思いつきりカツパを蹴っ飛ばした。

その日、川辺でくつろいでいたカモの親子は、突然川から飛び出してきたヘンテコな物体にびっくりして、大あわてで飛んでいったそうだ。

あとには水面にプカプカ浮く緑色の甲羅と、大きな古カワウソがいた。

「・・・手加減で言葉知ってる?」

「何甘ったれたこと言つてんだい、早く行くよ、時間がない」

姐さんの馬鹿力のおかげもあり、ついにカツパは、本当に何十年、いや百年振りに川を飛び出したのだつた。

勢いよく水面から外へ出た時の興奮と快感で、まだ胸がドキドキしている。強い日射しに目がクラクラした。懐かしい匂い、遠くに広がる山々、そして世界を覆う果てなく澄んだ青空。

そんな感動にひたる暇もなく、カツパは慣れない二足歩行で姐さんの後を走つた。

草を分け入つてたどり着いたのは、古い祠だつた。あの川の水神様を祀つたものらしい。

その前にはカツパにとつて、この世で一番恐ろしい生き物が立ちはだかっていた。



## 賢治のまちから 高校生☆電話大賞

人間だ！

その鬼のような形相と大きな体に、すっかりカツパは震え上がってしまう。さつきまでの勇気はどこかへ吹き飛んだ。

「ふん、カツパじやねえか。まだいたんだなこの辺にも。おどろいたな」

図太い声に背筋が凍る。

怖い。ダメだ、やつぱり怖い。

人間の後ろに透明な箱があつた。中ではヒキが弱りきつた目でカツパを見つめている。ドキリとして、カツパはぐつと背筋を正す。

そうだ、ヒキを助けなくては。

弱気になつてはいけない。こいつらからヒキを取り戻すんだ。そのためには自分は、川を飛び出したんだから。

キツと氣合いを入れ、人間をにらみつける。

怖いのに変わりはないが、それでも体の震えは収まつた。カワウソ姐さんが、間に入る。

「こいつはアタシらの中でも有名な悪党で、たくさんの獣なかまが捕まつてるんだ。でも多少は話のわかるヤツで、勝負に勝てば見逃してくれるつてさ」

「おいお前、こいつを取り戻したいんだつて？だつたら俺と相撲で勝負だこう見えて俺は力自慢なんでな。カツパに勝つたなんていい自慢の種じやねえか。もしもお前が勝つたらこいつを離してやる」

「ほ、本当だなつ」

「当たり前だ。しかし俺が勝つたら、お前の頭の皿と、カツパ伝来の秘薬とやらを寄こせ」

さ、皿を！おまけに家宝の秘薬まで！

「どうする、止めるなら今だ。こんなカエル放つておけばいいじゃねえか」人間は自信ありげに笑つた。その太くて丸太ののような腕は、本当に強そうだ。

カツパは最悪の状況を創造する。ヒキも救えないばかりか、自分の命も危うい。

しかし逃げることだけはできない。もうカツパは逃げないことに決めたのだ。

それに死んだら死んだで本望だ。皿くらい何枚でもくれてやる。そのとき姉さんが、何かをカツパに投げて寄こした。

緑色のつややかな。

「キュウリ……？」

カツパの大好物。もう何十年も食べていない。

姉さんは照れくさそうに、尻尾を振る。

「人間のどこからちよろまかしてやつたんだよ。アンタみたいなヒヨロヒヨロ、何か食べなきや力出ないだろ」

「姐さん……」

震えて冷たかった胸が、ギュッと溶け出していく感じがした。

カツパはその青々としたキュウリを、ガブリとひと囁りした。

おいしい。

泣きそうになるのをこらえ、すっかり食べてしまつたカツパは、ようやく人間と向き合つた。

即席の土俵の上で。

「行くぞカツパ野郎」

「来てみろ、人間」

カツパは何だかもう自分が本当のカツパになれたような気がした。そうだ、自分はカツパなんだ。カツパは。

「はつけよい…………のこつた！」

姉さんの声で二人は同時に動いた。そして勝負はすぐについた。まるで川のような緩やかな動きで、カツパは軽々と人間を投げ飛ばしていた。

人間は頭から地面に倒れ込んだ。どうして、という表情のまま。

なぜって。

カツパは、相撲が大得意なのだから。

昼間、川の生き物たちが活発に動き出す頃、一匹は並んで河原を歩いていた。

まだ完全に地上が平気になつたわけではないカツパは、最近少しづつ川から離れられるようになつてきていた。ヒキとの、一緒に「クルマ」とかいうものを見にいこう、という約束を果たすために。

「ホントによかった、もしかしてダメかも知れないと思つたけどさ、あいつもなかなかやるじゃないか」

そんなカツパの様子を、カワウソの姉さんとその腕に抱かれたカメが、祠の前から見届けていた。その隣にぼんやりと、白くやわらかな光がたたずんでいる。

「でも気づかないもんかね。あんなにうまいこといくなんて、とか、ちつたあ疑つたつていいものを。わざわざ水……ええ、そんなもんですか。終わりよければなんとやら、ってやつですかねえ」

ねえ、アンタのことを心配してたのは、何も川の仲間だけじゃないんだよ。姐さんは心の中で語りかけた。

